親鸞と二河白道喩

石原斌夫

一　白道四五寸

善導の『観経散善義』の二河白道喩について親鸞は『愚禿鈔』『文類聚鈔』『教行信証・信巻』の三書において、それぞれ解釈をのべている。三書は同じ親鸞の書ながら解釈が違っている。これに着目して親鸞における「善導の心」の解釈の微妙な変化を考えてみる。三書は逐次増広の跡があり、その成立の前後関係を明快にすることは困難である。しかし白道の関係個所に関する限り『愚禿鈔』『聚鈔』『信巻』の順に配列を仮定して検討をするのがこの場合都合がよい。この前提に立つて二河白道喩の中から「白道四五寸」「能生清浄願往生心」「一心正念」の三つを取り上げて比較検討をする。

先づ「白道四五寸」について。『信巻』では白道を「本願一実之直道、大般涅槃無上之大道也」といい『愚禿鈔』は「白者則是、六度万行定散也。斯即自力小善路也」といっている。白道の「道」について『愚禿鈔』は「道言、対路」といっているが特に深く触れていない。更に「路者則是二乗三乗万善諸行之小路也」といっているから「道」は大道、「路」は小路という解釈である。「四五寸」について「四言喩四大毒蛇、五言喩五陰悪獣也」といつて衆生の煩悩の喩えにしている。「衆生の心」の中に微かに起つた自力の善心であるという。これに対し『信巻』は「白者即是選択摂取之白業往相廻向之浄業也」といい、又「道者則是本願一実之直道、大般涅槃無上之大道也」といっている。「四五寸」については「喩衆生四大五陰也」と簡単である。

『散善義』の白道表現に表わされた廻向発願心の心相解釈に『愚禿鈔』は自力小善、『信巻』は本願一実之直道、大般涅槃無上之大道といつて正反対の解釈である。白道について『愚禿鈔』は「衆生の心」と考え『信巻』は「如来の心」と考えている。『聚鈔』には白道解釈はない。

二　能生清浄願往生心

次に「能生清浄願往生心」について。『散善義』は「言中間白道四五寸、則喩衆生貪瞋煩悩中、能生清浄願往生心也」といっている。善導によれば能生清浄願往生心は白道四五寸の意味である。『愚禿鈔』は「言能生清浄願往生心者、発起無上信心、金剛真心也。斯如来廻向之信楽也」といっている。『聚鈔』は「言能生清浄願心、即非凡夫自力心。大悲廻向心也。故言清浄願心」といっている。『信巻』は「言能生清浄願心者、獲得金剛真心也。本願力廻向大信心海故不可破壊。喩之如金剛也」といっている。いづれも清浄願往生心を、如来の廻向心であるというところは同じである。しかし「能生」の解釈について『愚禿鈔』と『信巻』では違っている。『愚禿鈔』は「金剛の真心を発起する」といっているが『信巻』は「金剛の真心を獲得する」といっている。「発起する」とは「衆生の心」が「如来の心」を起すことであり「獲得する」とは「衆生の心」が「如来の心」をつかむことである。「発起」は「衆生の心」の一部が「如来の心」に変質するという意味をもち「衆生の心」と「如来の心」を区別する立場は曖昧である。「獲得」は「衆生の心」が「如来の心」を把握することで「衆生の心」と「如来の心」の区別は明快である。他力廻向の親鸞の立場をよく出している。

三　『散善義』の二河白道喩

『信巻』では如来廻向の論理は明快であるのに『愚禿鈔』では未だ不徹底さを残している。理由は『散善義』廻向発願心釈の持つ性格にある。『散善義』の二河白道喩は『観経』上品上生の廻向発願心の立場であって、修学大乗上善の凡夫人の心相である。善導は「言中間白道四五寸者、即喩衆生貪瞋煩悩中、能生清浄願住生心也」といい又「善心微故喩如白道」といっている白道四五寸の意味を二つの面から述べている。一つは、白道が「善心微」なる相を表わすこと。もう一つは、白道が「願往生の心」であること。この意味に比較的忠実なのが『愚禿鈔』である。「善心微」なるところから、白道四五寸を「自力小善」と解釈し、能生清浄願往生心を金剛真心を「発起」するという不徹底な解釈である。『信巻』の白道は「如来の心」で四五寸に見えるのは「衆生の心」が、その様に見るに過ぎないという立場に切り換わっている。そして、白道は本来「如来の心」であるというところから「能生」の意味を「発起」から「獲得」の意味に変えている。『聚鈔』には白道四五寸の解釈はない。能生清浄願往生心については「能生」には触れず、清浄願往生心の「往生」の語を削除して「清浄願心」としており、解釈は「非凡夫自力心」としている。『愚禿鈔』と『信巻』の中間の態度である。

四　一心正念

『愚禿鈔』と『聚鈔』が取り上げていて『信巻』に無い言葉に「一心正念」がある。これは『散善義』では「弥陀悲心招喚」の声である。この声によつて衆生は「一心直進、念道而行」であつて「彼願力之道」に乗ずることである。『愚禿鈔』は「一心」は直実信心であるが、「正念」は本願であり、行であり、金剛心であるといつている。『聚鈔』では「一心」は信心で「正念」は称名即ち行であるといつていて明快である。『愚禿鈔』では行信は未分化である。

ところでこの「一心正念」を『聚鈔』は三心釈の三心即一心釈の根拠の一つにしているが『信巻』では姿を消している。この問題についての詳細は他の機会にゆずる。

五　親鸞の白道解釈

『愚禿鈔』後半部は『散善義』三心釈の抜粋である。その中に二河白道喩に関する記戴がある。この時点における親鸞は、既に本願力廻向の立場を確立している。しかし『信巻』の徹底した白道解釈に比べると、善導の性格をかなり温存している。親鸞の白道解釈が本願力廻向の立場に向つて、順次絞られて行く過程を考えた場合『愚禿鈔』は『散善義』と『信巻』の中間に位置すると考えられる。白道四五寸とは、善導が心に抱いた廻向発願心で「必須決定真実心中、廻向願作得生想」という自己作励の心を伴つた願往生心である。「善心微」なる相である。明らかに『愚禿鈔』の「自力小善」で「大道」ではない。それが如何にして『信巻』の本願一実之直道、大般涅槃無上之大道という解釈になつたか。それは親鸞の善導解釈上の大きな変化によるものである。善導は「今信順二尊之意、不顧水火二河、念念無遣、乗彼願力之道」といつている。これは「汝、一心正念直来」という如来招喚の声に随う善導の心を表わしている。親鸞は、善導のこの心の中に乗本願力の心を見ている。而も、この乗本願力の心は善導の廻向発願心という心の中にかいま見られた「善心微」なる相、従つて「白道四五寸」という状態である。しかし、この様に善導が計らずも述べている乗本願力の心に注目した親鸞は、善導において本願力への指向は奥深いと洞察するに至つている。白道は四五寸という細い存在であるが金剛の如く不壊である。本願力指向の心が善導の内心の奥深くに、常に底流していると親鸞は見通すに至つた。親鸞は『愚禿鈔』から『聚鈔』『信巻』に至る過程において、善導の「二河白道喩」をその表面の心相と、内奥の心相とに分析していつた。深層心理の洞察である。そして、その内部の心相を重視して『信巻』の「本願一実之直道、大般涅槃無上之大道也」という独自の白道観を樹立するに至つたのである。

（祖父江高等学校教諭）